『古代アメリカ』3,2000,pp.83－88

＜書評＞

中村誠一著

『マヤ文明はなぜ滅んだか？－よみがえる古代都市興亡の歴史』

東京：Newton Press　1999年

271＋6頁、定価1,400円

長谷川悦夫（東京大学大学院）

評者が古代マヤ文明研究にはじめて触れたのは、10年前、書店でみつけた石田英一郎の『マヤ文明』（中公新書）を手にとったときだったと思う。本書のプロローグでは、中村がやはりこの本に触発されてマヤ研究を志したことが回顧されている。1967年の出版以来、かくもながきにわたって日本語によるマヤ文明研究の入り口となってきた石田の著作であるが、近年では翻訳も含めたマヤ文明の概説書の出版も相次ぎ、ようやくその座をあけ渡しつつあるようだ。

進展著しいマヤ文明研究の新しい成果を反映したそれら最近の出版の中でも、本書は、著者の該博な知識と16年間にも及ぶ中米でのフィールドワークの経験によってたつものであり、入門者から研究者まで、マヤ文明に関心を持つ全ての人にとっての必読の書といえる。

著者は1983年から1994年までホンデュラス共和国ラ・エントラーダで行なわれたJICAとホンデュラス国立人類学歴史学研究所の考古学プロジェクトのほぼ全期間にわたりチームリーダーを務め、現在もコパン遺跡の修復プロジェクト(PICPAC)のディレクターとして活躍中である。マヤ文明の概説書という体裁を取りつつも、本書30-31頁に述べられているとおり、マヤ地域の東南辺境のコパン、そしてそのコパンのさらに周縁であるラ・エントラーダからの視点に立って、「ペテン中心主義」を問いなおす試みが本書の主眼である。以下本書の内容を要約する。なお、本書では、先古典期、古典期、後古典期を通じた記述がなされてはいるが、著者の関心は古典期の諸センターの発展と崩壊にあり、議論の重点もそこにおかれている。よって、ややバランスを欠くことにはなるが、以下の要約でも古典期をとりあげた第四章と第五章を詳しく紹介する。

・第一章：マヤ研究の最前線

著者が長年携わったラ・エントラーダ考古学プロジェクトの紹介にはじまり、マヤ文明研究における学際的アプローチの重要性、メソアメリカの中でのマヤの位置付け、高地と低地という地域区分と先古典期・古典期・後古典期という年代区分（前者に対しては否定的、後者に対しては現状を踏まえた上で擁護している）が述べられている。前述したように、いわゆる「周縁」と呼ばれる地域からの視点にたってマヤ文明を見なおすという立場表明が行なわる。

・第二章：文明の形成と巨大都市の出現

初期の人間活動の証拠、階層社会の萌芽、オルメカ、イサパとマヤ文明の起源にかんしてまとめられている。とくに、エル・ミラドール、ナクベの二遺跡については、詳しく記述されている。

まず、マヤ地域で、なぜ社会の階層化が起こったか、という問題についての説明には、複数要因

説を示唆する。

続いて、「オルメカ→イサパ→低地マヤ」という単系的な発展図式が、ペテン低地の先古典期の大センター(エル・ミラドール、ナクベ)の調査などによって否定され、多極盛衰型のマヤ文明観へと転換する研究史の流れが要約される。ここで用語の問題にふれる。「多極盛衰型のマヤ文明観」という本書のいたるところで用いられるキーワードであるが、これはマヤ文明研究の最近の動向を的確にあらわしている。蛇足を承知で説明を加えると、これは「上昇期（先古典期）から、最盛期（古典期）を経て、退廃期（後古典期）へ至る」という古いマヤ文明観から、「先古典期、古典期、後古典期のいずれの時代にもその時代ごとに発展、繁栄、衰退が繰り返された」という新しいマヤ文明観へ、そしてさらに「マヤ地域全体が一様にそのような発展、繁栄、衰退のサイクルを繰り返したのではなく、各都市・地域ごとの発展、繁栄、衰退の時期にはズレがあり、ある都市・地域が繁栄すると同時に他の都市・地域が停滞するのであり、しかも一方の繁栄と他方の停滞の間には相互に関係が見られる」、という変遷を経た最も新しい歴史観をあらわす。また著者が多用する「脈動的」というやや聞きなれない言葉も、「ひとつの都市・地域の勢力の上昇と他の都市・地域の勢力の下降、その逆転現象、さらにその繰り返し」というこの現象を形容したものである。

とはいえ、本章の最終節のタイトル「マヤ文明はどのように形成されたか」にあらわれているとおり、ここでの著者の主たる関心は先古典期の社会発展が古典期へとどのようにつながっていったかという問題である。著者にとっては、マヤ文明＝古典期文明であり、先古典期はやはりマヤ文明の「形成期」なのかもしれない。周縁からの視点に立つ著者は、「ペテン中心主義」と「南部主導説」の対立、あるいはそれらの折衷というマクロな観点に加えて、低地（ペテン）とも高地（南部）ともいえない南東地域(コパン、ラ・エントラーダなど)の歴史の解明によって、多方向で複雑な相互関係が存在したというミクロな観点から、「地域ごとの多様で固有のプロセスの総体」としてのマヤ文明の形成過程を解明できる(pp.74-75)と主張する。

・第三章：マヤ文字の解読

文字、数字、暦にかんして説明される。キリグアの石碑J、コパンの祭壇Qにくわえ、著者の調査地であるラ・エントラーダ出土の遺物に彫られたマヤ文字資料を用いて実際の解読の手順が紹介されている。ここで例示される二つの碑文は、後の章で重要性を持つ資料でもある。

・第四章：古典期王朝の興亡

マヤ古典期前期とテオティワカンの関係については、「テオティワカンによるマヤ地域征服」あるいは「政治的支配」という仮説を排しつつも、両地域には広範な人の交流があった、と推測する。そのような文化的・経済的交流を通して、マヤの支配者たちがテオティワカンの文化要素を自文化にとりこんでいったという解釈であり、現在のところ主流派の学説といえる。

つづいて、考古学調査の結果と、碑文学・図像学の資料を駆使し、ティカル、カラクムル、パレンケという代表的な古典期の都市の王朝史が再構成される。個々の内容には立ち入らないが、記述のスタイルとして以下の特徴を挙げることができる。例えば、パレンケ王朝の起源を語る際に著者も強調しているように、マヤ文字の解読の結果を盲信することなく、考古学資料や同時代の他の都市の碑文などにより確実に裏がとれているかどうかを検討する。また、AD378年、ティカルとワシャクトゥンの間に起こった出来事とは何か、6世紀後半のティカルの衰退の原因は何だったのか、という問題などを取り扱うに際しても、複数の解釈を羅列するにとどまらず、各々の解釈の根拠や傍証にも注意深く言及し、さらにその歴史事象がマヤ古典期文明史全体の中でもつ意義についても

著者の見解が提示されている。

さて、本章の最終節の「コパン盛衰史」（pp.179-218）は、著者が最も本領を発揮する部分である。重要な箇所なのでやや詳しく紹介したい。

まず、コパン王朝の起源の問題にかなりの紙幅が費やされている。というのはこの問題が、本書のテーマである「ペテン中心主義批判」と密接に関連しているからである。

次に、コパンと並んでマヤ地域東南辺境の重要な都市であるキリグアが、ティカルからの植民によって成立したのかどうかという問題が論じられる。ここでも、著者の立場は明快であり、「キリグアの起源に他都市が関連しているとすれば、ティカルよりもはるかに地理的に近いコパンのほうが可能性が高い」(p.195)として、ペテン中心主義的な解釈を退ける。

続いて、コパンのアクロポリス内部のトンネル発掘調査の成果と関連して、7代王から11代王までの事績が語られる。この時点で、著者が長年フィールドとしてきたラ・エントラーダでの研究成果が紹介される。当地域の地方センターであるエル・プエンテの建造物1の内部で検出された建造物サブ1がコパン10代、あるいは11代王のものとされるコパンアクロポリス内部の建造物と様式的に類似しているというのである。この事実は地方センターとしてのエル・プエンテの建設の背景にコパンがどの程度からんでいたのか、言い換えれば、コパンが周辺地域をどのように支配域に組み入れていったのかという問題に関連する。著者は、これが「コパン王朝のラ・エントラーダ地域への拡大を示す間接的な証拠」(p.203)と捉えている。興味深いのは、著者が、テオティワカンとマヤ、ティカルとコパンの場合とは異なり、コパンとエル・プエンテにかんしては、物質文化の類似の背後に政治的支配、植民といったコパンからの「拡大」があった、という解釈に傾いていることである。これは東南地域における「コパン中心主義」ととれなくもない。

この後、コパン12、13代王の時代が語られる。コパンが全盛期に登りつめるが、その絶頂期にあって、有名な738年事件でキリグアに破れ、南東地域での覇権を失う。この事件の後、キリグアは最盛期へと向かい、コパンは大規模建造物の建造再開といううわべの復興とは裏腹に、コパン谷内部においても周辺地域においても急速に求心力を失ってゆき、衰退の坂を下るという。論拠として著者はいくつかの碑文学的・図像学的解釈を紹介しているが、一例を挙げれば、14代王の建造物であるポポル・ナが政治的合議の場であったという解釈をあげ、都市国家コパンの意志決定機構が、それまでの王の独裁制から合議制へ変化し、王権の弱体化とそれまで従属的であった臣下や周縁部の首長たちの勢力が伸張するという現象が読み取れると指摘する。

ここで再びラ・エントラーダの事例が紹介される。著者が発掘したもうひとつの地方センターであるラス・ピラスの調査結果が紹介され、この遺跡にも、支配者が自らの居館を王のごとく飾り立てたり、王者の装束をまとって石彫にあらわれたり、紋章文字を使用した可能性もあるとする。著者はこれをコパン王家から、地方首長への公的権力や権威の委譲であるとし、その裏には彼らを宥和し、自らへの求心力を保とうとしたコパン王家の必死の努力があったと推測する。しかし、このような努力も空しく、16代王の死後コパン王朝は崩壊し、やがて都市全体が放棄される。

・第五章：古典期文明の崩壊

この章のはじめで、著者は「古典期マヤ文明の崩壊」という現象を定義した後、「古典期文明の崩壊などなかった」というサブロフの主張に対して反論を行う。石碑建立などのエリート層の物質文化のパターンが消失するという現象は軽視するべきではなく、この現象が東はホンデュラス西部から西はチアパス州まで広大な領域を席巻したものであり、その後中部低地には大センターが復興することがなかった点からも、それまでの脈動的な各都市の繁栄と衰退の繰り返しという現象とは一線を

画するものであったとする。「崩壊は確かにあった」というのが著者の見解である。

次に、崩壊の要因は何かという議論へと進むわけであるが、単一の要因説から複合要因説へという近年の論調の推移を述べた後、都市間の戦争、都市内部の首長や臣下の反乱、環境・生態系の破壊、長距離交易ルートの再編成、プトゥンの侵入の諸説を紹介し、これらの諸要因が、各地域ごとにことなった重みをもちながらも相互にからみ合い、複雑な経過のもとで崩壊が起ったと述べる。

著者によれば「古典期文明の崩壊が示しているのは、古典期文明の本質そのものであり、その社会が有していた構造的な限界」である(p.239)。マヤの王国の政治組織や王権の性格について、著者の考えはデマレスト[Demarest 1992]と同じ線上にある。つまり、古典期のマヤ王の支配基盤は、経済的なものではなく、より観念的なものであり、それゆえに不安定で多極盛衰型の歴史動態を持った。また、著者自身が述べているとおり、マーカスの「動態モデル」にも大きな示唆を受けている。ただし、マーカスと異なる点は、彼女が、少なくとも紀元531年からスペイン征服に至るまで、主要都市を中心とする統合と、2次センターの離反による諸政体の分裂のサイクルが繰り返されたとし[Marcus 1993: 164]、古典期と後古典期のあいだの質的な違いを重視しない立場をとるのに対して、著者の独自な点は、上記のように相互関係網の発達と相互依存の強化が構造的な限界をもたらし、古典期文明は確かに「崩壊した」という点にあるといえる。

・第六章：古典期以後のマヤ文明

古典期から後古典期への移行についてもまた、近年の研究成果によって、従来のマヤ文明史観から大きな転換があった。具体的には、「中部低地の衰退」→「プウク地域の興隆」→「外来集団の都市チチェン・イツァーによるプウク諸都市の征服とユカタン北部の支配」という歴史の再構成が見直される。

第一に、これらの出来事が時間的に重なり合うことが指摘され、これはマクロな視点から見た脈動的なマヤの歴史動態と説明される。第二に、チチェン・イツァーが本当にメキシコ高原のトゥーラから来た外来者集団の根拠地だったのかという問題が論じられる。この問題については著者は、いまだ各地の編年が整備されていないとして結論を保留する。いずれにせよ、著者が強調するのは、プトゥン・マヤと呼ばれる集団の動向である。トゥーラとチチェン・イツァーが直接的に結びつくか否かという問いは不毛であるとして退け、「さまざまなプトゥン集団の動きを、各地の物質文化パターンの類似と変容の媒介として間にはさむ視点」(p.268)の重要性を説く。

チチェン・イツァーの滅亡とマヤパンの覇権、そしてマヤパン崩壊後、スペイン人到来前夜のユカタン北部の状況を記述し本書は締めくくられている。

さて、本書の扱っている重要なテーマをもう一度ふりかえってみたい。

・古典期マヤ文明の成立と発展におけるペテン中心主義への批判

古典期マヤ文明の成立を著者の立場である東南辺境のコパン、さらにその周縁のラ・エントラーダからの視点から見たとき、どのようなことがいえるのだろうか。先古典期の大センターであるエル・ミラドール、ナクベこそがマヤ文明の起源である、またマヤ地域での王朝の成立が最も早いのはティカルであり、マヤ地域の南東と北西のコパンとパレンケでは、それに遅れること約200年、ほぼ同時に王朝が成立した可能性があることから、これは中核地域のティカルから辺境地域への古典期王朝の拡散現象を示すものである、とするのがペテン中心主義者の主張である。これに対する著者の反論は以下の引用のとおりである「コパンと南部地域のつながりや、紀元後およそ50年以降の物質

文化パターンの連続性、また、碑文が示唆している前時代の支配者の系譜の存在などの資料を総合的に考慮すると、コパンに、中部低地に依存しない独自の王朝成立と古典期文化の形成があった可能性も考えられるのである」(p.185)。

著者のいうとおり、コパンでは先古典期後期－古典期前期のビハックと呼ばれる土器フェーズからは、土器も前時代からの連続性を持つものに加えて、多彩色土器の出現が見られ、これはペテン低地ではなく南部地域とのつながりを持つ。この時期、建築活動も活発化するという。碑文が示唆する、ヤシュ・クック・モー(コパン初代王)以前の支配者存在の可能性ともあわせて、確かに著者の主張にはうなずけるものがある。人口の集中、社会の階層化、モニュメンタルな建造物、洗練された工芸品などで定義される「文明」を考えれば、著者のいうように、各地域との交流も含めて、コパンにはコパン独自のプロセスがあり、それはけっしてペテン低地からの直線的な拡散ではなかった。しかしながら、世襲制の王朝、マヤ文字、文字を彫りこんだ石碑や祭壇の建立、擬似アーチ構造の部屋を持つ大規模建造物という「マヤ古典期」を特徴付ける要素にかんしては、ペテン低地が先進地域であり、確かに中心から周縁への波及があったように見える。コパンでのこれらの要素の出現はティカルに遅れ、その周縁のラ・エントラーダではさらに遅れているのである。要は「古典期マヤ文明」をどのレベルで定義するかであろう。我々がマヤ文明を観るとき、そこには「マヤをマヤたらしめる何か」が、確かにある。もちろん著者も古典期マヤ文明をさまざまな都市・地域の政治勢力のモザイクに解体しようとしているのではなく、あくまでそれらのプロセスの総体を重視している。

・古典期マヤ文明の崩壊とマヤ王権の性格

崩壊の原因については単一要因説から複合要因説へというのが現在の研究の動向であり、著者もこの流れに沿っていることは既に述べた。評者が重要だと思うのは、著者がそこからさらに一歩踏み込んで、「地域ごとに異なった複雑な経過のもとに都市の崩壊が引き起こされたのなら、どうして中部地域全域で崩壊が起ったのか」という問いを発していることである。この問いに対する著者の答えは、相互関係網の発達が各都市の王家同士を、王と臣下を、あるいは地方首長を密接な相互依存関係へと導き、いったん何らかの原因でこの関係にひびが入るや、それが連鎖反応的に全体へと広がっていった、というものである。南東地域からの視点としてキリグアがコパンを破った738年事件を例に出す。この事件は、従来なら脈動的な盛衰パターンのうちに収まるはずであったが、時とともに強化された王、臣下、地方首長の「相互依存関係」という構造には修復不能なダメージを与えてしまったというのである。それではこの「相互依存関係」とはいかなるものだったのであろうか。デマレストにヒントを得た著者がこれを、「支配を正統化し、社会を維持するための王の権威＝求心力」というような観念的なものであったと考えているのは容易に読みとれる。マヤの王権基盤についてのデマレストの論は「生態学モデル」(あるいは物質的、経済的モデル)の対極に位置するものである。著者自身は他の論考でこれに全面的に賛成するものではないと述べてはいるが[中村 1997: 177]、仮りに生態学モデルと東南アジアの前近代の王権にかんするタンバイアの論をマヤに援用したデマレストの観念論的ともいうべきモデルの両極端のあいだに著者を位置付けるとすれば、明らかにデマレストに傾いている。本書の中にマヤ(地域)の生態環境、生業、経済などにかんする記述がほとんど見あたらないこともこれを物語っている。この点について評者は次のような問いを発したくなる。「そもそもキリグアがコパンにそむいた原因にはすでに経済的・物質的権益があったのではないか」、「ペテシュバトゥン地域に見られるように戦争の質が変化し、殲滅戦が行なわれるようになった背景は観念的なもので説明できるのだろうか」。

当然ながらいくつかの未回答の問いを残してはいるが、本書は現在のマヤ文明研究の最新の到達点を示すものである。概説書という体裁をとりながらも、著者のオリジナリティーが十分に発揮されており、文章は簡潔で、論のはこびも明快である。マヤ文明に興味を持つ人が一人でも多く本書を読まれることを希望する。

参考文献

Demarest, A.

1992 Ideology in Ancient Maya Cultural Evolution: The Dynamics of Galactic Polities. In *Ideology and Pre-Columbian Civilizations*. Demarest, A. and G. Conrad, editors, pp.135-157. School of American Research Press, Santa Fe.

Marcus, J.

1993 Ancient Maya Political Organization. In *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.* Sabloff, J. and J. Henderson, editors, pp.111-184. Dumberton Oaks Research Library and Collection.

中村誠一

1997 「南東地域から見た古典期マヤ文明の崩壊」『ラテンアメリカ研究年報』17、pp.157-186